

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月15日現在

機関番号：34419

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2011

課題番号：20510258

研究課題名（和文） 生殖と身体をめぐる“自然主義”の再検討

研究課題名（英文） Reexamination of “Naturalism” implicit in Reproduction and the Control of Human Body

研究代表者

大越 愛子 (OOGOSHI AIKO)

近畿大学・文芸学部・教授

研究者番号：00223777

研究成果の概要（和文）：

社会や技術の変化と進展に伴って、特に生殖をめぐる旧来の法・制度の限界が明確に意識されつつある中、本研究では後者の本質を生殖と身体をめぐる「自然主義」と特徴づけ、フェミニズム理論から代理母出産等の現実問題、過去の国家政策に至るまで、広範な領域における「自然」概念の検証・批判と、今後に向けた課題の整理を行った。最終年度にその成果を、研究分担者・連携者を中心とした6名の寄稿者による論文集として印刷・配布を行った。

研究成果の概要（英文）：

In the ongoing development of reproductive technology and the remarkable change of general perception concerning “family”, “conception”, “birth” etc., we define our general mode of thinking which usually underlies our conventional opinions as “naturalism”. We interpreted, criticized and tried in some way overcome this mode from various points of view, such as feminist theories, historical studies, narrative studies and ethical consideration.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：ジェンダー論

科研費の分科・細目：ジェンダー

キーワード：ジェンダー論、フェミニズム、生命倫理、自然主義、生殖補助医療、優生思想、戦争と性暴力、リプロダクティブ・ヘルス/ライツ

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究開始当時は、代理出産の是非が一般のメディアでも大きく取り上げられ、法的・倫理的・社会的問題に対する応答が、生命倫理等の人文系研究分野からも求められている状況であった。

(2) 一方で、「産む性」としての女性の身体の自然性をどのように捉え返すか、という問題が、リプロダクティブ・ヘルス/ライツとの関連でフェミニズム内部においても論争が続けられていた。とりわけ「少子化」問題が盛んに議論されている情勢の中で、単なる政策レベルに止まるのではない、哲学・思想レ

ベルに立った批判的考察が、生命倫理あるいはジェンダー論において要請されていた。

(3) 研究代表者・大越と研究分担者・井桁の両名は軍性奴隷制やハンセン病の問題に長年関わっていたが、改めてそこで自明視されていた「性欲自然主義」や「優生思想」を理論的に分析する必要性が、上記問題と本質的に関連する問題として意識され始めていた。近代国家とそれを支える「自然主義」イデオロギーが、規範としてのあるべき社会・家族・個人像をいかに形成し維持して来たか、という問題の再検討は、現代における「自然主義」的言説を批判的に捉え直す上での必須の作業と考えられた。

2. 研究の目的

(1) 過去の優生思想や女性蔑視に基づく、国家や社会運動家による身体管理の言説を分析し、科学あるいは「自然」概念を掲げたバイオポリティクスの歴史的形態を批判的に再検証する。

(2) 現代の生殖補助医療の進歩と普及に伴う、医療従事者やメディアで流布する言説を分析し、そこに働く規範としての「自然」概念の機能を分析する。

(3) 同じく現代の生殖補助医療の展開に対する、特にフェミニストたちの諸言説を整理・検討し、新しい時代にふさわしい「身体」概念の再構築を構想する。

3. 研究の方法

(1) 生殖と身体をめぐる「自然主義」について理論的考察を加えていると考えられるフェミニズム・生命倫理関係の文献を収集・検討した。また平行して、生殖補助医療に関わった医療従事者や当事者の意識について、書籍や一般メディア上の言説を通して、あるいは実際の聞き取りを行うことによって検討した。

(2) 「自然主義」イデオロギーに基づく制度的な暴力や抑圧、差別を実際に受けた／受けていると考えられる当事者たちの聞き取りを行った。具体的には、国内のハンセン病療養施設（2ヶ所）の実地調査、いわゆる従軍慰安婦被害者の聞き取り、性同一性障害や「見た目」問題の当事者・支援者を研究会に招致しての質疑応答、等を各年度に行った。

4. 研究成果

研究過程において、研究代表者・分担者・連携研究者は随時、学会発表や論文執筆等で成果を発表してきたが、最終年度にそれを集

約して、論集『「生殖と身体をめぐる“自然主義”の再検討」研究成果報告書』を作成、関係各方面に配布した。したがって本研究の成果は、同論集に収録された5本の論文、3本の研究ノートに集約・表現されていると言える。具体的には、

(1) 日本におけるハンセン病患者の隔離政策の根底に、「国民優生法」に象徴される優生思想が科学の名をまもって存在したことを検証した上で、欧米の優生思想へと問題を遡及し、「人種」「血統」を自然主義的に捉えることへの誘惑と危険性が今なお潜在し続けていることを、今日的課題としてあぶり出した（特に井桁論文）。

(2) フェミニズムによる「性と生殖の自由」の提起を通して、「懐胎・分娩」の負担が女性に一方的に課せられてきたことの自明性が問い直されてきた経緯が確認された上で、それを自然であるが故に受忍すべき労苦としてではなく、「自由な労働」として捉え直す必要が、特に生殖新時代や「少子化問題」を考察する際の前提として、明確にされた（特に大越論文、森岡論文）。

(3) 現実的な問題として「生殖ツーリズム」の隆盛に関して、それを単に抽象的な次元からの倫理や正義の問題として捉えるだけではなく、現実には女性が置かれた状況・文脈において捉え直した上で、社会として生殖補助医療という「不自然」な技術をいかに受容していくべきか、という問題として考えなければならぬことが提起された（特に白水論文）。

以上。

こうした論点が本研究参加者たちに共有されただけではなく、広く他の研究者たちにも提起されたことは、今後の実りある議論の展開のために一定以上の意義を有しているものと自負もし、期待もしている。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計12件）

① 大越愛子、『懐胎・分娩』とはいかなる労働か 『自然』から『自由』へ、「生殖と身体をめぐる“自然主義”の再検討」研究成果報告書、査読無、2012、1-21

② 井桁碧、「日本人」は立ち去ったか——人種・民族主義と「生殖」のポリティクス、「生殖と身体をめぐる“自然主義”の再検討」研究成果報告書、査読無、2012、23-41

③ 白水士郎、生殖ツーリズムは途上国女性の

「搾取」か?、「生殖と身体をめぐる“自然主義”の再検討」研究成果報告書、査読無、2012、43-53

④大越愛子、戦争と性暴力、フォーラム現代社会学、査読無、2011、28-36

⑤大越愛子、子ども論ノート…愛育・疎外そして権利、渾沌（近畿大学大学院文芸学研究科紀要）、査読有、2009、97-110

⑥井桁碧、見ようとしているか／聴こうとしているか 問い直す「ジェンダー視点」、部落解放（解放出版社）、査読無、2009、44-53

〔学会発表〕（計3件）

①大越愛子、哲学の観点からジェンダーを語る、日本ホワイトヘッド・プロセス学会、2010年9月18日

②大越愛子、戦争と性暴力、関西社会学会、2010年5月30日

〔図書〕（計2件）

大越愛子、井桁碧（編著）、青弓社、現代フェミニズムのエッセックス、2010、320

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大越 愛子 (OOGOSHI AIKO)
近畿大学・文芸学部・教授
研究者番号：00223777

(2) 研究分担者

井桁 碧 (IGETA MIDORI)
近畿大学・文芸学部・教授
研究者番号：40306105

白水 士郎 (SHIROUZU SHIRO)
近畿大学・文芸学部・准教授
研究者番号：10319759

(3) 連携研究者

森岡 正博 (MORIOKA MASAHIRO)
大阪府立大学・人間社会学部・教授
研究者番号：80192708